

柳

SAKAKIHA



三重県神道青年会報 第14号



会長 村田 正和

# 折り返しを

# 迎えて

## たびたび 創ろう新しい出発

## こころ 受け継ごう伝統

昨年四月七日の定例総会に於いて、会長の御指名を戴いてより、早くも一年が経とうとしている。副会長、委員長、会員に助けられながら、どうやら形だけは出来たと思うが、それはあくまで形だけであって、強いインパクトが生まれ、青年らしきという事業展開が出来たかとなると十分とは言いがたい。どうしても伝統という過去の経験の上に安全を取る意識が働くからであろうか。

正直なところ二年間という任期の中で、それを踏まえた上での所信で有るので、一年で評価が出せないという感も有るが、しかし、人が変われば形が変わり、特色が出てこそ、そこに活性化を見出す時、少し『元気の素』がもつとつと活力として爆発出来なかつた事を今反省している。

私は今この原稿をワードプロセ

ッサーで書いているが、ワープロと書くこと自体もう滑稽なくらい普及している。昭和五十三年に東芝から六百三十万円で出されたワープロは僅か十年で値段は六十分の一、大きさは三十分の一になって、高度情報化社会へと流れている。ニューメディアという幕は切って落され、どんどん社会がコンピュータ化している中で、所信に掲げた『受け継ごう伝統・創ろう新しい出発』を再度確認しなければならぬ。

新宗教がどんどん増えているがニューメディアに成れば成る程彼等は現世利益的要素が強すぎて世間的に非難を浴び、制度的に制約を受ける様な気がする。我々神道は共同体の中核としての神社があり、活性化させる可能性は大いにあると思う。

ここでアメリカの例を紹介すると、米国の大手証券会社「シェアソン・リーマン社」東京支店の調査部長ジョン・サナン・ジョセフ氏は日本の企業の業績を調査分析する仕事をしているが、最近ある事に思い当たった。「会社」とは「会社」の意味ではないかと言っただ。

「終身雇用を基本とする日本の会社と社員は、神社と氏子のような関係に見える。だから、日本人はグループを大切にし、グループでは強い。米国人はその反対だと思っ」と述べている。単なるビジネスマンの目ではないと思う。もう一つアメリカでは日本企業の進出が目覚ましいが、それに伴って、「地鎮祭」がおおはやり。しかし、日本企業だけでなく、米国企業・中国系企業も「地鎮祭」をやりだした。「グラント・ブレイキング・セレモニー(地鎮祭)」は神の土地を使わせてもらうと共に、お互いの心を柔らかにする為に行うと説明し、玉串は「シンボル・オブ・ツル・ハーツ(真心の象徴)」と表現されているのである。

この二つの例を見ても、神道は世界に通じる「素晴らしい道」である。もっと神道を深く認識すると共に御遷宮へ向けての更なるバネと、節目としての四十周年事業の準備に努力を重ねていく覚悟であるので、会員の更なる協力をお願い申し上げ、折り返しを迎えて一生懸命に頑張りたいと心する次第である。

# 委員長の声

## 一年間を顧みて今年の抱負を語る



総務委員長 渡辺 和洋

〇六十二年度の反省  
委員相互の意思疎通と連携への配慮を欠き、活動が極めて緩慢になったことは、何はさておき反省と自戒としたい。

その結果、懸案の一つであった、会報「神青通信」の発行が延滞のままであることを、お詫びしたい。

〇本年度の活動

六十二年度の反省を踏まえ、活動の円滑迅速を旨に、以下懸案事項の早期実現を期したい。

- 一、「神青通信」発行の定期化
- 年三〜四回の発行を期したい。
- 一、会則変更の提案

役員改選に伴う新旧の引継ぎ、次期役員着任後の神青会運営の円滑化を図るため、昭和六十一年四月三十日改正施行の現会則の、役

員の選出条項また関連条項を中心に、検討したい。

- 一、税務研修会の開催

宗教法人に対する税務当局の対処方針が極めて厳しくなりつつある現状にあつて、神社界でも、正しい税に関する知識の修得と、有効な税務処理の必要が迫られています。

此のような折、講師を招聘し、県下の幅広い神社人の参加を得て、税務研修会を開催したい。



教化研修委員長 中 森 孝 栄

我々教化研修委員会は、例年行なわれていた事業は勿論行なっていくつもりである。昨年は、事業の計画など遅くなり皆様に迷惑を掛けた事を反省し、早期計画を立て行なうなどの心積りである。そ



企画開発委員長 宇治土公 貞 明

今やっておかなければならない事がある。現在の神社界をみるにつけて、これは私達神道青年会が手をつけておかねば、と思う事がある。やむにやまれぬ気持ちから、以下の四点を本年度の課題とした。

の中に私達は一つの事業を加えた事が有ります。会員の中には、宮司として神社の要となり氏子の導きに苦慮している人も居ますが、まだ年若く人生の経験少なく氏子の悩みを軽くする事は難しいのではないかと思えます。しかし、私達青年神職も早かれ遅かれ宮司となり神社の責任者として、氏子の悩みを聞き導びかなければならなくなる時が来るはずで。

そこで、私達は今年度、諸先輩方々の経験を基に人々の色々な悩みに対する社頭講話を教えて戴きたく思い、講話マニュアルの作成を予定しました。本末転倒ではあるが、これかれの神職として必要不可欠ではないだろうか。

- (1) 神道青年会運動の在り方を考える。
- (2) 神社の経営を研究する。
- (3) 神社神道神学確立への提言を行う。
- (4) 三重県神道青年会創立四十周年記念事業を企画する。

第一に、神青会とは何だ。常に時代の先駆けとして新たな問題を提起し、その地平から現在につながる歴史を語るべきである。

しかし、今はどうか。本社本庁を意識する時代は過ぎ去った。指定団体地点から突出せよ。独創性こそが私達のエネルギーだ。

第二に、神社を維持するという事に本気になるべきだ。ところで、何故、残さねばならないのか。収益事業や副業をしてまで本当に未来につなげなければならぬ氏神社とは何なのか。信仰の質はそれで大丈夫なのだろうか。差し迫った問題として、次々に湧き出る疑問をもまともに取り上げたい。

第三に、この動きの速い世の中で、祭祀をつづけ、教化を行う為に

は神学が必要だ。ごまかしからは何も生れない。神職はお寺さんに葬式を出してもらってもよいのか。神宮大麻は何故皆がまつらねばならないのか。私達が教えられた「神学」は実は必要なことに何一つ答えられないのではないのか。

以上のように考えながら、三重県神社関係者においても、一大ターニングポイントになるであろう創立四十周年を次代への出発点とするために、記念事業を考えていきたい。

毎月委員会を開き研究を重ねるとともに、本年度は二回(予定)の「神青会セミナー」を開催し、主要なテーマに添ったかたちで講演、意見交換を行なった。会員各位のご指導、ご支援を願うものである。(昭和63年2月22日記)



広報渉外委員長  
岩田 健司

浅学非才な私が図らずも村田新執行部の広報渉外委員長として大役を仰せ付かってより時を経るにつれ、その責務の重大さを痛感し

ている昨今でございます。しかし乍ら我が広報・渉外委員会では人並以上の気力とお祭りごとが大好きなメンバーに恵まれ、諸先輩方が長きに亘り築かれた礎の上に不慣れた委員長を助け、自慢の行動力で素晴らしい活動、予期以上の成果を上げ「只今絶好調」の内に二年目を迎える事が出来ましたのも偏に会員皆様方の御協力と心より御礼申し上げます。

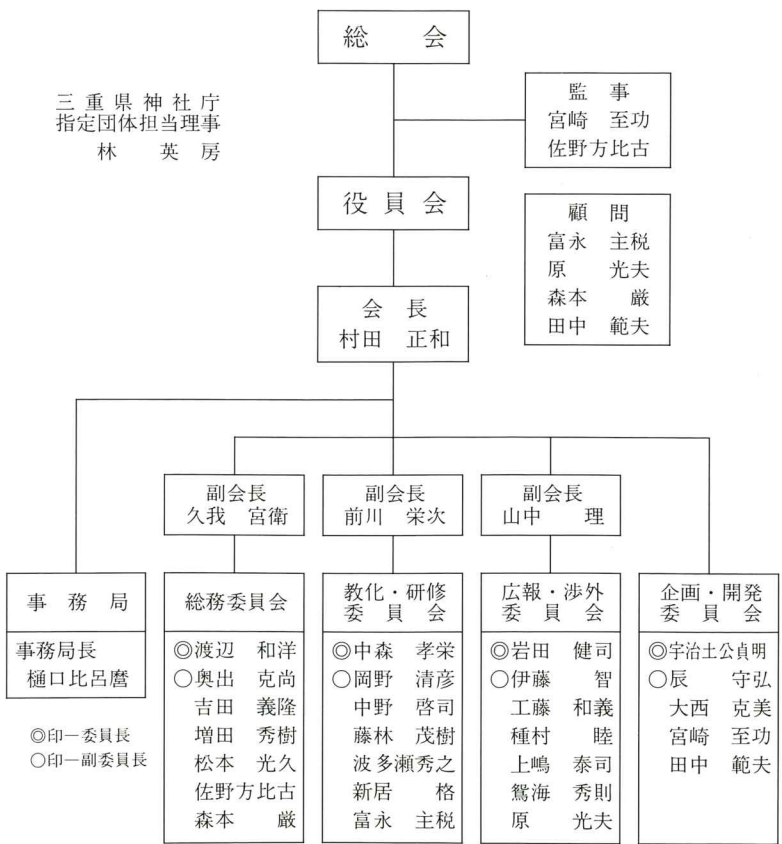
して二度と繰り返してはならない深い感慨を噛みしめ、護国の御英霊への追悼と慰霊は我々神職は申すまでもなく日本国民が絶対守らねばならない義務として固く心に刻み込んだものでした。

今日の合理的観念のもとに、眼に見える「物」の世界を重んじ、はかりにくい「心」の世界を軽ん

じる現代であればこそ、人間社会の根底にある本末を確立して微動だもせぬ神祭りこそ全世界の人類に通用する普遍的な原理であって、二十一世紀に向けていよいよ光りきらめく神道の時代と確信している次第であります。

会員各位の一層の参加、協力をお願い申し上げます。

### 組 織 図



## 昭和六十二年度 事業報告

### 新入会員歓迎会



若さハツラツ新会員

昨年五月二十二日、恒例の神道青年会新入会員歓迎会が津グラウンドホールに於いて開催された。参加人数は新入会員六名を含む三十九名。久我副会長より開会の辞が宣言され、選手代表中野会員によって選手宣誓、村田会長の始球式に続きゲームが開始された。競技方法は、神宮・北勢・中勢・南勢伊賀南紀合同の四ブロックに分か

- れ各ブロックの上位五名の総合得点を競う団体の部と個人の得点を競う個人の部で行われた。各会員それぞれ大健闘で、中にはユニホームを揃えてくる会員の姿もみられた。また、ゲーム終了後、神社庁において表彰式、懇親会が行われ、新入会員の自己紹介、入賞者に賞品がプレゼントされるなど楽しい懇親会となった。結果は左記の通りである。
- 団体の部
    - 優勝 南勢伊賀南紀合同
    - 準優勝 北勢地区
  - 個人男子の部
    - 優勝 松本光久・二見興玉神社
    - 準優勝 上嶋泰司・頭之宮四方神社
  - 個人女子の部
    - 優勝 中西由佳・猿田彦神社
    - 準優勝 朝田由香・三重県護国神社
  - ハイゲーム賞 上嶋泰司
  - 新人賞 池田陽一・椿大神社

### お宮の子供会を終えて

第十二回、お宮の子供会を、尾鷲神社で行い、神道青年会々員の皆様を始め、出向を許して下さった奉務神社宮司様、尾鷲神社宮司様、又地元の方々の協力によって、成功の内に終えさせて頂きました。

今回、会長の意図もあり、少ない財源によって行ないましたが、何とか出来ました。しかし、これも会員一人一人が持ち寄りたり、寄付してくれた事によって出来た事だと思えますが、やはり備品等は早く集めるよう心掛けておいて欲しいものです。この先も長く続け



朝の魚市場見学

### 会 務 日 誌

- ◎昭和六十二年
  - 四月七日 六十一年度定例総会
  - 四月十七日 県神社総代会定例総会
  - 二十二日 神青協第三十九回 定例総会
  - 二十七日 第一回役員会
  - 五月十三日 広報渉外委員会①
  - お木曳き氏青櫻行事奉仕
  - 二十日 教化研修委員会①
  - 二十二日 第二回役員会
  - 新入会員歓迎会
  - 六月四日 広報渉外委員会②

# 研修旅行

御英靈奉斎諸問題、又皇室護持をいかに推進してゆくかという問題を考える為、八月二十六・二十七日の二日間に亘って研修旅行を兼ねた皇居並びに靖国神社参拝を企画し、二十名が参加した。

会員の親睦を深める意味で、貸切バスを使い、第一日目は新築された神社本庁を見学し、夜は懇親会となった。



新築なった神社本庁前で

見学し、御英靈の遺品等をまのあたりにし、感慨新たに神社を後に午後より皇居を拝観した。

両日共に天候に恵まれ、意義ある研修旅行となった。

# 東海五県神道青年教化研修会

本年は、静岡県神道青年会当番により、九月七日・八日の両日にわたり静岡浅間神社会館に於て「教化活動」というテーマのもと、開催された。

第一日目「神社界をめぐる時局の再確認」と題して、国学院大学日本文化研究所・助教授大原康男先生を迎えて二時間に亘り講演を拝聴した。

午後四時からは「教化活動」というテーマに基づき各県を代表し

ての活動報告会が開かれた。

また午後六時からは懇親会が催され、お酒が進むにつれ和やかな楽しいムードは高まりみるみる間に時間は過ぎていった。

二日目(九月八日)は恒例の五県対抗野球大会、我が三重県チームは初戦長野県に敗れ涙のみ、熱戦が続いた野球大会も静岡県の優勝と共に、全日程を終了した。

互いの健闘を讃え合い帰路についた。



小串宮司の講演

# 第一回セミナー

十月六日午後四時三十分から、神社庁三F研修講堂にて、村田会長以下神青メンバー並に神社庁教化委員の有志、総勢四十名程参集のもと開催された。神青の先輩にして、神社経営の現状と神道青年会の役割というテーマに添ったお話を具体的にわかりやすくして下さる方として、多度神社の小串和夫宮司を講師としてお招きし、御講話を頂いた。

同宮司は多度神社・宮司の就任前は、東京の乃木神社で手腕を発揮された方で、若千35才の若さで乃木神社の宮司となり、御鎮座60周年の記念事業では宝物殿剣道場を

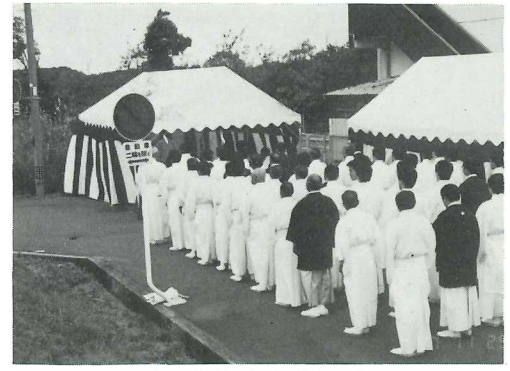
- 六月十六日 指定団体合同会議
- 十七日 教化研修委員会②
- 十八日 奉賛会県本部設立総会
- 二十二日 第三回役員会 助勢奉仕
- 二十三日 企画開発委員会①
- 七月八日 総務委員会①
- 十日 昭和六十二年度会員名簿 発行
- 二十日 第四回役員会
- 八月六・七・八日 広報渉外委員会③
- 八月六・七・八日 第十二回お宮の子供会
- 十三日 総務委員会②
- 二十六・七日 研修旅行
- 九月二日 企画開発委員会②
- 第五回役員会
- 七・八日 東海五県神道青年会 連絡協議会及び研修会

新設し、社務所儀式殿等を一新するなどの境内整備をなし、神社運営の基盤としての乃木会館を設立当初から責任者としてきりまわし神社の安定と繁栄に、格別寄与している現状からでは想像もできない当時の苦しい状態、それを乗り越きり今日の基盤形成にいたるまでの体験を中心に話され、皆に多大の感銘を与えた。その後活発な質疑応答がなされ、午後六時盛會裡に終了した。

# 大麻頒布運動に思う

今日、核家族が拡大していると言われている。その核家族の集団が団地である。その団地での神宮大麻頒布の難しさを感じた。

遠く親元を離れた夫婦と子供達の生活を守る為、仕事に追われ、近隣の人も交わりが少なく、心を狭く閉じた生活を送る人々に少しでも田舎のような、心の安らぎやゆとりをと思行なったのであるが、不要戸数が半数、不在を入ると九割もあった。「初年だから」と自分に言い聞かせたが、やはり



大麻頒布始奉告祭

気落ちする。私達の行なっている団地はもっとお祀りしてくれる家庭は多い。六割は受けてくれる。なぜこれだけの差があるのかと考えると、私達の団地の人は氏子から出た家庭が多く、又親元が近くに居る。その為親からの受け入れが多い。又田舎のような団地では近隣の付き合いがあるからではないだろうか。もう一つには、周囲の神社では、授与品に神札が多く御守が少なく、神棚を必要とするからではないだろうか、と思つ。しかし、此の団地ではそういった要素が少ないのでは、この先、代々神職は、他の宗教が伝導活動していったように活動・探究して行かなくてはならないだろう。

# 忘年会・卒業式



卒業会員に花束贈呈

師走も迫る昭和六十二年十一月二十九日恒例の忘年会が鈴鹿山系御在所岳の麓、新湯の山観光ホテルに於て卒業式を兼ねて会員三十名の参加をもって催された。

今年、桑名市大山田団地での神宮大麻頒布運動に参加した後に行われ、直会を兼ねた感じの強い忘年会であった。

先ずは一年間の総締めとして、村田会長が挨拶、次いで今回初めての企画として、本年度をもって神道青年会を卒業される方を送る卒業式が行われ、当日出席された山下・宇佐美両会員に記念品と花束が贈呈され、山中副会長が送辞を述

- 十四日 教化研修委員会③
- 十六・七・八・九日 神青協夏期セミナー
- 十月六日 第一回神青会セミナー
- 十五日 神宮初穂曳き
- 二十六日 第六回役員会
- 三十日 神社関係者大会助勢奉仕
- 十日 広報渉外委員会④
- 二十日 第七回役員会
- 二十九日 吉千万家庭神宮大麻 奉斎運動奉仕
- 忘年会・卒業式
- 十二月二日 北勢ブロック会
- ◎昭和六十三年
- 一月十八日 神宮初参拝
- 第八回役員会
- 二月九日 企画開発委員会③
- 十二日 第九回役員会

べると、これを受けて両会員より、永年に亘る感謝と今後の同会益々の発展を望む御言葉を送り、会員一同から盛大な拍手が送られた。この後、久我副会長の乾杯の音頭に合わせて懇親会へと移り、一

### 神道青年全国協議会中央研修会

本年の中央研修会は去る二月二十三日、二十四日の両日にわたり、岐阜グランドホテルを会場とし、本県より十六名参加の上、盛大に執行された。

講演は加瀬英明氏(外交評論家)が、基督教・イスラム教と神道の食を中心としたとらえ方の相違、国内外政治に於ける米作、農業の背景と根底問題、宮中祭祀、神社祭祀と稲と司祭者等幅広い知識の中より、我々に課せられた役割、新時代への期待を述べられた。

又茂木栄氏(国大日本文化研究所助教授)は田遊儀礼について、又風土記紀記等における稲についての観念、米国に於ける稲作、食糧制度、水がめとしての田の重要性を指摘された。又各地区意見発表にて(稲作農家が氏子にない神社に於てお米についての教化的問題等興味深い点

段と和やいだ雰囲気の中で、しし鍋に舌鼓をうちながら、先輩後輩入り乱れ、互いに一年間を回想しつつ労を讃え合い、歌に話しにと宴は盛況を極めた。

も数多くあった。又討議においては、岐阜県護国神社森宮司、両講師が、今や農業・工業といった形を造る時代から心身を鍛え養う心の時代となろうとされている。教育に於て、郷土愛、伝統継承、道徳、真実の歴史等を理解させられなく、国際化時代に対応できない。また、世界的に神道思想は注目されるべきものであるが、単に宗教として輸出するのは問題である等、白熱した討議が行われ、本年も一段と内容の濃い研修会であった。

### 植樹祭

昭和五十九年より県下各地で執り行なってきた「植樹祭」も本年度で第五回目、締め括りの年を迎え、今回は南紀地区を対象に、去る三月二十五日、紀伊長島町の二



第五回植樹祭(二郷神社にて)

郷神社に於て開催された。

当日は早朝より生憎の雨模様、行事の運営も危ぶまれたが、植樹の時期に相応しい「恵みの雨」とは、神社総代さんの談。

午後一時半、片岡副庁長、坂本尾鷲市支部長を始め約五十名の参列を得て、神前に於て植樹祭を斎行、祭主を務めた二郷神社の東宮司さん(女性)の奉告の祝詞が拝殿に朗々と響いた。

祭典中に雨も上がり、東宮司、村田会長等関係者の手により記念植樹を行ない、希望者に神宮より下付頂いた松の苗木二百本余をお頒ちして無事行事を終えた。後片付けが済んで、宮司さん心

- 十八日 総務委員会③
- 二十三・四日 神青協中央研修会
- 三月三日 広報渉外委員会⑤
- 六日 教化研修委員会④
- 十五日 第十回役員会
- 十八日 広報渉外委員会⑥
- 二十四日 三重県護国神社合祀祭 奉仕
- 二十五日 植樹祭
- 二十八・九日 神青協遷宮研修会
- 三十日 企画開発委員会④

尽くしの茶席につき、会員一同祭典の緊張も解れて歓談の一時を過ぎ、お開きとなった。本行事の開催について、終始格別のお心遣いを頂いた二郷神社の宮司さん、又総代の皆さまに深甚の謝意を表したい。

### 三重の神社めぐり (8) 飯野神社

市 日 市	1 7 1
町 鹿 市	2 2 7
鈴 鹿 市	0593-82-0703
鎮 座 地	佐野方比古
電 話	坂倉芳夫
宮 司	権 宜
権 称	

#### ◇御祭神

豊宇気比売神(主祭神)  
高御産巢日神  
正哉吾勝々速日天之忍穗耳命  
大山津見神 少名比古那神  
天照大御神 火之迦具土神  
保食神 須佐之男神

#### ◇例 祭

十月十五日

#### ◇建 物

本殿(神明造り) 一坪  
拜殿 十六坪  
通殿 十一坪  
社務所 四十五坪

#### ◇境内地

一千三百七坪

#### ◇氏子数

一百二十戸



### ◇◇ 御由緒 ◇◇

飯野神社は式内社で、弘治元年(一五五五年)神戸城主神戸藏人友盛の崇敬の念厚く、この友盛により造営され、その際に高市神社(主祭神・高御産巢日神)を遷し合殿とした。天正の兵火により社殿が焼失したと伝えられている。その時に二本の楠木が焼失を免れ、当時、木の幹の太さが一丈六尺(約四・八尺)、一丈八尺(約五・四尺)であったと記されています。現在その二本の楠木は神木として、幹の太さ約六尺と七尺の大木に成長しています。

### 事務局通信

明治以降、地区内にあるいくつかの神社を合祀、分祀を重ね、明治六年には村社に列せられています。現在、産業開発衣食住守護、飯野郷産土神として氏子の崇敬を集めており、お祭りには厳粛な祭典の後、氏子の手により様々な催事が執り行われて賑わいを増しています。特に昨年より三十有余年跡絶えていた神楽を復活し、他にも近年手水舎の新築など神社施設の充実に努め、近い将来にはご本殿等のご造営も計画されております。

会員ニュース等ありましたら、事務局迄御連絡下さい。来る昭和六十四年度には、本会も四十周年を迎えることとなり、現執行部の任期中ではありませんが、現在より種々企画立案等準備を致しております。本会活動と併せて、御意見等ございましたら、事務局まで御連絡下さい。左記のものを幹旋致しておりますので、御希望の方は事務局までお申し込み下さい。

- 一、祭典用傘 四、〇〇〇円
- 一、「自分史マニユアル」 三、八〇〇円

空白部分に書き込むだけで立派な自分史が完成致します。

#### 表紙

### 人長舞について

一条天皇の御代、我が国上代以来の神明奉仕の大精神を根幹として作られたもので、今日、宮中、神宮などで舞われている。手には御鏡に擬した白い輪のついた柿を持ち神楽歌につれて舞われる。

本会は、会則第三・四条の通り県内神職にして満四十歳迄の者を以て構成し、会員相互の研鑽と親睦を図り、神社神道の興隆を期しております。年間を通じて各委員会を中心として、各種事業を行っておりますので、趣旨を御理解戴き時間の許す限り、一人でも多くの会員の御参加をお願い致します。(年会費五、〇〇〇円)

本書を上梓された葦津彦氏はこれまで非難される神道を社会的に防衛するという困難な活動を続けられ、主に法理的な立場から時局論をもって論戦、特に敗戦後約十年間の歩みは、勿論小職の我々には到底及ぶ所ではないが、「国家神道」という制度と思想、それが正確には何だったのか。神社官制が再整備された明治元年から昭和二十年の終戦に至る七十七年間の歴史を、近代神道史を専攻する国学院大学教授 丸氏の註記を添え刊行された。

この著書の史論は神道指令によって変革を余儀なくされた諸問題、例えば政教問題などその根底にある「国家神道」の一般通常概念は、特定のイデオロギーに基づき運用されてきた。その一例としては村上重良氏の「国家神道」(岩波新書)等が上げられよう。また著者は最近朝日新聞(昭・60・3・25付夕刊)に「国家神道は復活しえぬ」、「神社・神道不当に冷遇」との見だしで談話を発表したら、反神道者か

ら批判があり、それらを遺憾として全面回答を試みた。以上が本書の経緯となったが、基督教・仏教等の各宗教者、また神社・神道内部にあっても極めて大きい啓蒙の書となっている。本書の全内容については紙面上に割愛せざるを得ないが、まず第一に注目したいのは、明治四年、仏教界でも一勢力を有していた浄土真宗本願寺派の僧・島地黙雷が、「神社非宗教説」を主張、新政府

て、巖父耕次郎氏またその盟友頭山満等からの薫陶、影響を受けた熱烈な在野神道信仰者であった著者自ら「大正、昭和の在野神道と政府の国家神道との複雑な対決、交錯を無視しては政府の国家神道が何であつたかは解明できない」と強調されている。

以上三点を特に銘記したが、最後に「明治以来の真摯なる神道人の志を前提源流として出発したものではあるが、非神道の政治権力と非神道の宗教勢力からの強いブレーキとの交錯が重なって、それらの諸力に中和されて、その精神は全く空白化した無精神な、世俗合理主義で無気力にして無能なものであつたというのが歴史の真相に近い。」と結論しておられるが、これほど客観的、ラジカルに批評する葦津氏にはただ畏敬せずにはおれないが、神社・神道の性格を考えた場合、この地上国家に高天原同様の理想を遍く顕現することが我々の使命なのであるが、種々困難な状況を乗り越え、新しい時代に向かつて邁進しなければならぬであらう。

# 『国家神道とは何だったのか』

◇一神道防衛者の国家神道論◇

榊大神社 権祿宜 鈴木 悟

会報「榊 葉」  
第14号  
昭和63年 3月31日発行  
発行者 村田 正和  
編集 広報渉外委員会  
発行所 津市鳥居町210-2  
三重県神社庁内  
三重県神道青年会

昭和64年度 創立40周年に際し

# 神道青年会 募集

昭和63年 7月31日迄

先 募 応 津市鳥居町210-2  
三重県神社庁内  
神道青年会事務局まで

我とおもわん方、どしどし御応募下さい。  
尚、優秀作品には賞状及び記念品の贈呈があります。